

6. 古文学

本国の古文学を研究するのは、国民の義務ではなくて、権利である。芸術上の造詣は、本来天才を基礎としなければならないが、思想と技巧の涵養もとても重要で、前人の経験と蓄積とはその必要とする材料で、わたしの友人が最近西安から手紙を寄せて、“……前人がわれわれに残してくれた無数の綾羅や緞子は、裁って着物にされることもない、今こそまさにそれを利用して、裁縫の腕をふるうべきで、裂帛撕扇で気晴らしをする用に使うてはいけない。経験を蔑視するのは、われわれの愚昧であり、前人を抹殺するのは、われわれの罪過である”とやってきた。実にとても真っ当である。この前人の経験と蓄積は当然本国に限らない。ただ研究の便宜上、外国の文学は言語と資料の関係から直接の研究はやや困難だから、自分たちの国語の知識を利用して古代の文学の研究に入っていく、創作力あるいは文芸鑑賞の趣味を養うのが、最も上策であり、これこそまさに国民が享受する一つの権利である。

われわれは古文学を研究するのは権利であって義務ではないことを認定する以上、伝統に服従する必要はない。われわれが古代文学を読むのに、われわれの享受と愉楽を最も妨げ、われわれに正解を外させたり魔道に陥めたりするのは、歴来のかの“業儒”〔儒学の教授を職とする人〕という人たちの解説である。ちょうど玉帛鐘鼓はもともとは真っ当な礼楽なのに、彼らは別に名分の意味を付け加えようとするようなもので、そこですべての叙事・抒情の詩文もいたるところ綱常名教のペンキを塗られてしまう。「関関たる雎鳩」はもとは優れた恋愛詩であるが、彼らはこれは“后妃の徳なり、風の始めなり、天下を風して夫婦を正す所以なり”と言う。「南にききょう樛木有り」も結婚の歌であるのに、“后妃の下に逮ぶなり、能く下に逮んで嫉妬の心無きを言うなり”と言う。こうした解説を経て、かの儒業者たちが崇拜する多妻主義は更なる擁護を得たようだが、すでに詩の本当の意味は完全に抹殺されている。もしわれわれがそれを訂正しなかったならば、この二篇の詩の真価は明らかにならなかつただろう。ヘブライの「雅歌」は以前はやはりユダヤ教及びキリスト教の聖書の中に取り込まれ、魂と神の愛を歌ったものだと言われたが、今ではとっくに改められ、みんなはそれが一巻の祝婚歌集であることを認めている。われわれがもし『詩経』の旧説を訂正して、国風を古代の民謡として読むならば、現在の歌謡の研究あるいは新詩の創作の上できっと大きな効用があろう、これは断言することができる。中国の歴代の詩は『詩経』の影響を受けなかったものはない。ただ伝統の関係のため、相変わらず“美刺”〔褒めると貶す〕の束縛に囚われ、それはまさに小説の勸善懲悪と同じで、完全に名教の奴隷になってしまっている。さらにある人々は忠君愛国を詩批評の基準にして、古詩十九首に対して、いささかこの基準に合わないところがある、しかしまた廃棄するのはもったいないように思われ、そこで奇想天外にもそうした詩を皆“君を思う作”と解釈した。これはむろんみな嘘である——決してわれわれが君主政治を憎悪するから彼らに反対するわけではなく、実際にこの解説は事理に合わないからである。世上には君主が臣下を自分のために尽忠させるといふ事実がある。だが文学から言えば、そうした忠愛の詩文は、（もし明らかにそうした類に属するものがあるとすれば、）故意に人を欺くのでなければ、無意識に己を欺くので、本当の文学とは言えない。中国の

文芸上の伝統の主張は、まさしくこのうぬぼれの“名教のための芸術”であって、まず先にこの主張を打破しないで、がむしやりに古代文学の研究をしても、得るところが多くないばかりか、畏にはまって、迷路に入るだろう。これは用心警戒せざるべからざる事である。

古文学の研究は、現代文芸の形式にも大きな利益がある。現在の詩文の著作はすべて口語文を使い、いわゆる古文とは違うけれども、結局は同じ来源で、その表現力の優劣は基本的には一致している。だから古文学について前人の経験を考察するのは、創作のスタイルの上でも少なからぬ助けを得られるだろう。たとえば無韻の詩という問題を検討するのに、もし歴来の韻文の成績、「国風」から小調〔小唄・端唄の類〕までを参照すれば、——民衆文学は多くが新作だけれども、それが沿襲する格調の源流はとても古い、——中国語の有韻の詩の成績及びそのフレキシブルな様々な形式、——以後の新作のものは、たとい思想が少し違っても、韻を用いさえすれば、格調はすべてその範囲を抜け出せないことを知ることができる。試しにここ何年かの有韻の新詩を見てみれば、あるものは“白話の唐詩”であり、あるものは詞であり、あるものは——小調であり、しかも旧詩の中の最も不幸な“掛脚韻”*と“趁韻”〔意味に関係なく韻だけを考えて句を作ること〕もしょっちゅう出現する。そうした韻が合わないものには、やはり様々な欠点があるけれども、一種の新体——新しい生活のある詩であることは確かだ。それがただ“自然の音節”^{リズム}に重きを置いているために、比較的真切に書けているのだ。この尾韻はないが内面の諧律のある詩の好例は、流行の俗歌の中に常に得ることができる。われわれは従って白話詩の二つの道を見つけることができる。一つは押韻をしなくてもよい新体詩、一つは押韻する“白話唐詩”から小調までである。これは一般的な言い方で、大きな才能があつて有韻の新詩を作れる人については、当然自由に作つてよいが、ただ“白話唐詩”から小調までに似てはならないことを条件にする。旧詩を作れる才能のある人は、やはり自由に作つてよいと思うが、やはり李・杜・蘇・黄やあるいは他の何人にも似てはならないことを条件とする。ただ古文にも通じていない人だけは、旧詩を賛嘆する必要はないし、むろん作る資格はない。——しかしながらいまは文理に通じない人にかぎつていよいよ古文を作り古詩を作ることを喜ぶのは、まことに“自然の嘲弄”だと言える。

※初出：1922年3月5日『晨报副刊』

* 掛脚韻 未詳。